

【「ミスター」梗概】

隣市のケアハウスに住む八十九歳の父は、重い病氣にかかっているわけではないのだけれど、体は衰え、動きが鈍り、言葉は減り、私は次第に、いつ死んでもおかしくないと思うようになつた。その一方で、父は、今まで食べていなかつた焼き肉に急にハマつて、しきりに連れて行くよう催促する。髪もぼさぼさしていたので、ある日、焼き肉と散髪に連れて行くことにした。移動の車の中では、父の好きな「北国の春」を一緒に歌つた。それらの合間合間に、これまでの父のことが、行つたり来たり、ほつりほつりと、思い出される。

焼き肉にも散髪にも満足した様子で帰つた数日後のバレンタインデーに、父から直筆の手紙が届き、心を揺さぶられるというか、かき乱される。それからまあ、いろいろあって、ホワイトデーにもまた手紙が届く。ボケているのか、芯を喰つてているのか、なんだかよく分からんが、そういう私も、屁のような人間だ。